

氏名（本籍）	増淵（蓮井）貴子
学位の種類	博士（ヒューマン・ケア科学）
学位記番号	博甲第 7470 号
学位授与年月	平成 27 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	青年期及び成人期の月経随伴症状をめぐる 心理社会的要因に関する研究
主査	筑波大学准教授 博士（学術）橋本佐由理
副査	筑波大学教授 博士（ヒューマン・ケア科学）松田ひとみ
副査	筑波大学准教授 医学博士 柳久子
副査	筑波大学教授 博士（人文科学）安藤智子

論文の内容の要旨

（目的）

わが国は、少子化や晩婚化、不妊人口増加など女性への支援が必要とされる社会問題が山積みであり、ライフステージに応じた女性特有の健康課題の予防・解決に国をあげて取り組もうとしている。そこで本研究では、特に女性の月経に関するトラブルが、ライフサイクルを通じた女性の QOL の低下につながりかねないため、その解決の一助となる示唆を得ることを目指した。

月経随伴症状の関連要因として、個人のストレス認知との関連が先行研究で多く報告されている点に着目した。生活上の様々な出来事をストレス源として認知するか否かは、個人の考え方や感じ方によるため、それを左右している自己イメージスクリプトが影響すると考えられる。すなわち月経随伴症状といった身体症状の強さには、自己イメージスクリプトのような心理社会的要因も関連すると考えた。

本研究は、月経随伴症状が課題となり始める 10 代後半の青年期及び 20 代から 40 代までの成人期女性の月経随伴症状と自己イメージスクリプトの関連を検討することを目的とした。さらに月経随伴症状と慢性的なストレス源認知、ストレス源に対する悪循環的な対処行動の関連を検討することで、青年期及び成人期の月経随伴症状のストレスマネジメント支援への示唆を得たいと考えた。

（対象と方法）

研究Ⅰでは、青年期にある看護学生に対し質問紙調査を実施し、回答を得られた 191 名を分析対象とし、月経随伴症状の強さと否定的な自己イメージスクリプトの関連を傾向性の検定、多重ロジスティック回帰分析、クラスター分析により検討した。

研究Ⅱでは、インターネットによる質問紙調査を実施し、回答を得られた 1,321 名を対象として

検討を行った。まず、研究Ⅱ-1では、月経随伴症状の強さと自己イメージスクリプト、情緒的支援認知、幼少期の両親の養育態度認知、抑うつ及びストレス気質発現認知との関連を検討した。また、研究Ⅱ-2では、月経随伴症状と慢性ストレス源認知、悪循環的対処行動の関連について傾向性の検定、多重ロジスティック回帰分析、クラスター分析を用いて検討した。

研究Ⅲでは共分散構造分析により月経随伴症状をめぐる心理社会的要因の因果関係の仮説モデルを構築し、年代や出産経験別の多母集団同時分析も行い、その差異を検討した。

(結果)

研究Ⅰでは、青年期の月経随伴症状の強さと自己否定感の強さ、感情認知困難度の高さとの関連が示された。クラスター分析により対象者を類型化した結果、自己否定感と感情認知困難度がともに高いグループは、否定的感情や痛みなど、月経随伴症状が他のグループに比較して有意に強く、家族からの情緒的支援認知や自己価値感が有意に低かった。

研究Ⅱ-1では、成人期の女性を対象としたが、青年期と同様に月経随伴症状の強さと自己否定感や感情認知困難度の高さが関連していた。そこで、研究Ⅰと同様に対象者を類型化した結果、自己否定感と感情認知困難度がともに高いグループは他のグループと比較して身体症状や精神症状、社会的症状のいずれも強いことが示唆された。また、同グループは、他のグループに比較して家族からの情緒的支援認知、幼少時の両親の養育態度認知が有意に低く、ストレス気質発現認知、抑うつが有意に高かった。

研究Ⅱ-2では、月経随伴症状の強さが慢性ストレス源認知や悪循環的対処行動のとりやすさと関連していた。特に月経随伴症状の強さと関連していた悪循環的対処行動は、「察しを求める」、「当たる」、「頑張り逃避」等の行動パターンであった。

研究Ⅲでは、月経随伴症状と自己イメージ、慢性ストレス源認知と悪循環的対処行動の因果関係の仮説モデルを検討した結果、「自己否定型の自己イメージ」は直接的に「慢性ストレス源認知と悪循環的対処行動」に影響を与えていた。また「自己否定型の自己イメージ」は「感情認知困難型の自己イメージ」を介して間接的にも「慢性ストレス源認知と悪循環的対処行動」に影響を与えていた。そして、「慢性ストレス源認知と悪循環的対処行動」は直接的に月経随伴症状の強さに影響を与えていた。また、本因果関係モデルの年代別及び出産経験別の多母集団同時分析では「自己否定型の自己イメージ」から「感情認知困難型の自己イメージ」及び「慢性ストレス源認知及び悪循環的対処行動」に与えるパス係数は、年代及び出産経験別でも差異がないことが明らかになった。

(考察)

本研究の結果、月経随伴症状の強さには、自己否定感の強さや感情認知困難度の高さが関連していた。そして、自己否定感や感情認知困難度がともに強いことと、月経随伴症状の強さ、支援認知の低さ等の関連が示唆された。自己否定感の強さが直接的に、また、感情認知困難度を介して間接的にも慢性的なストレス源認知に影響を与えていた。さらに、慢性的なストレス源認知や悪循環的対処行動が月経随伴症状の強さを促進する可能性を示した。このことから、自己を否定する気持ちを抱えつつ、自分の感情をみないようすることでストレスが慢性化することが月経随伴症状の強さを促進すると考えられた。

これまでの月経随伴症状のストレスマネジメント支援は対症療法的なものが中心であり、個人のストレスの感じやすさに影響を与える自己イメージスクリプトに焦点が当てられてはいなかった。

しかし、本研究の結果から、青年期及び成人期の月経随伴症状のストレスマネジメント支援には、否定的な自己イメージスクリプトの背景にある隠れた感情や欲求に気づき、自己イメージスクリプトの変容をはかること、また、悪循環的なストレス対処行動を良循環的な対処行動へ変容できるような支援が必要であると考えられた。今後は本研究で得られた知見をもとに、個人の隠れた欲求に気づき、周囲からの支援を認知できるストレスマネジメントプログラムの立案及び検討によって、包括的な女性健康支援が期待できると考えられる。

審査の結果の要旨

(批評)

本論文は、月経随伴症状といった身体症状について、心理社会的側面からの説明を試みたものであり、女性の月経トラブルへの支援を見出すために社会的意義の高い研究である。

本研究により月経随伴症状の強さは、個人のストレスの感じやすさを規定している否定的な自己イメージスクリプトが影響しているという新たな知見を得た。したがって、月経随伴症状の強さに悩む女性に対して、現存する対症療法的な支援のみならず、自己イメージスクリプトにも焦点をあてたストレスマネジメント支援が必要であることを明らかにした。

今後、本研究から得られた成果をもとに、症状に悩む女性に対して自己イメージスクリプトの変容に視点をあてたストレスマネジメント支援を行っていくことで、女性の健康支援につながるであろうことが期待できる。

平成 27 年 1 月 23 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。